



和達清夫監修

## 海洋大事典

東京堂出版, 1987年10月刊

589頁, 15,000円

海洋に関する本格的な事典が久方振りに刊行された。旧版『海洋の事典』の精神をひきつぎながら、全く新しい構想で、近年めざましい進歩をみせた海洋学と海洋に関する知識の諸成果をふまえて編集されたものである。項目の選択にも新しい視点と広い視野がみられ、大項目主義で「読む事典」をめざしているように思われる。装訂や造本、印刷のみやすさなど、大事典と称するにふさわしいと思う。海洋学界の主要メンバーを中心に、第一線の研究者、技術者が力をこめて書いていることが全編から感じられて、まず今回の刊行をよろこび祝福したい。また、関係者の御労苦に敬意を表わしたい。

筆者のささやかな経験からも、事典づくりの仕事が如何に多くの忍耐を要し、地味な作業を長時間かけて行わねばならないかわかるし、本書をひろい読みしてその感をますます深くしている。筆者は気象に興味を持つ人間なので、そうした方面のユーザーとして本書をみた感想を以下に述べる。したがって当然のことながら、本書が海洋の専門家や海洋学者からみてどうであるか、という点については発言する資格はない。そういう意味で偏った書評になることを、あらかじめお許し頂きたい。しかし、海洋と気象のかかわりの深さからいって、筆者の如きユーザー（または読者）も少なからず存在するものと思われるので、本文も少しは意味があると考えている。

ざっとみた所、大項目主義の特徴がうまくいかされており、個々の項目の説明文も概して読みやすい。その上で、項目の選定と表記、説明の仕方について気付いたこ

とを述べたい。

まず項目の選定であるが、たとえば「渦度方程式」は、本書の全体からみて果たして単独項目として必要であったか、もしそうなら何故「地衡流」や「乱流」、「カオス」等が単独項目とならないのだろうか。また、「IMO」が入っていないのは片手落ではないだろうか。次に表記の点であるが、普通名詞の英文名が大文字からはじまっていること、国際共同研究観測名の訳語でTOGAの「熱帯海洋と大気大循環の相互作用研究」は意識に過ぎないか、GARPをガルプと呼ぶのは日本のみの無理読みではないかという疑問がわく。

説明の仕方についてであるが、見解の相違といわれることを承知でいうと、「ENSO」でEl Niño年における大規模気象系のシフトの図がほしいし、「テレコネクション」では大気中のロスビー波の伝播についてもふれてほしかった。なお、人名引用でビヤークネスの場合は、V.かJ.か明記する必要がある。「海洋の数値モデル」では大気-海洋結合モデルの記述が簡単すぎると思う。ブライアン-真鍋以来の流れをもう少しとり入れてもよいのではないか。付録の選定も妥当と思うが、「外国の主な海洋調査研究機関」にChinaが脱落しているのは惜しい。

新しく刊行された事典・辞典類を買う場合の悩みは、その新鮮で吸収すべきことの多い内容に早く接したいという欲望と反面相対的に多い誤植や脱落の存在という欠点である。しかし、アクティブな研究者・技術者は、ちゅうちょすることなく前者の欲望にしたがうべきであろう。所詮、事典・辞典類も消耗品だからである。それにしても1万5千円という本書の定価をどうみるか。これも各人の欲望の強さによるだろう。

(気象庁予報部 新田 尚)

## 事務局からのお願い

昭和63年会費及び62年度購読誌の代金の請求は、昨年12月はじめに致しましたが、未だ納入されていない会員がありますので、至急送金下さるようお願いいたします。なお会費等は、次のとおりです。

○A会費(天気のみ) ¥5,500(学生¥3,500)

○B会費(天気と気象集誌) ¥10,300(学生¥6,500)

○気象研究ノート 155号~159号 ¥6,050

○大会予稿集 1987年春・秋の分 ¥4,000

○郵便振替「東京3-5958」加入者「日本気象学会」

以上

1988年2月